

## セルリーの収穫期別の品質

著者	福村 和則
雑誌名	鹿児島大学農学部農場技術調査報告書
巻	4
ページ	28-29
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/9826">http://hdl.handle.net/10232/9826</a>

## セルリーの収穫期別の品質

福村和則

### 緒言

セルリーはセリ科の植物で、特有の香りを持ち、我国では夏は高冷地、冬は暖地またはハウスで栽培されている。指宿植物試験場では水田の高度利用化の一環として早期水稻の後作として栽培を行っている。指宿地方におけるセルリー栽培は播種から収穫まで約6～9ヵ月間の長い期間を要する。市場性のある株は葉柄第1節が20cm以上の大株が求められ、収穫期の適切な判断が要求される。そこで収穫適期を判断する一方法として時期別の品質及び生育調査を行った。

### 材料と方法

供試品種はミニトップセラーで1994年6月2日に播種、7月13日に大型トンネルハウスの苗圃の地床に仮植した。ハウスは#610の黒寒冷紗で被覆した。9月12日に指宿植物試験場水田に定植した。畦幅は120cm、条間40cmの2条千鳥植えとし、栽培管理は慣行法で行った。生育形態調査は草丈、全重、出荷用調整重、糖度、葉数、葉柄第1節、第2節(第8図)の長さ、幅及び厚さ、葉、葉柄第1節中央部の硬度(クロスペーテル)について1994年11月21日より15日おきに1995年1月4日まで1回20本ずつ行った。施肥量は第1表に示すとおりとした。

第1表 施肥量(10アール当たり)

肥料名	全量	基肥	追肥1	追肥2	追肥3
堆肥	3,000kg				
尿素	100	40	20	20	20
熔成燐肥	160	160			
塩化加里	80	40	20	20	
苦土石灰	100	100			
菜種油粕	60	30	30		
ほう砂	2	2			

### 結果と考察

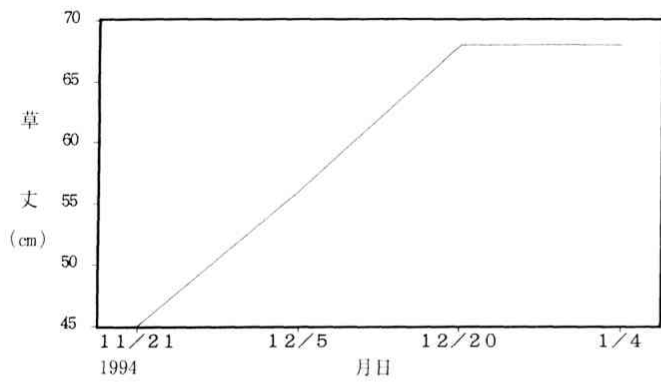
栽培地の気象は第2表に示すとおりであった。気温はほぼ平年並で、12月から1月は晴天の日が多く乾燥気味であった。調査期間中は4回の降霜を観測した。

草丈は12月20日までに68cmに伸長したが、その後はほとんど伸長しなかった(第1図)。12月中旬の最低気温は5.1℃に低下し、草丈の生長に影響したものと思われた。葉柄は第1、2節とも12月20日まで伸長し、その後第1節はほとんど伸長せず、第2節はゆるやかに伸長し16cmとなった。また、葉柄の幅、厚さは調査開始時から少しずつ増加した(第2、3図)。葉柄第1節長が10cm以上の葉数は11月21日は1株に10枚であったが、12月20日には最大の18本に達した(第4図)。全重、調整重、第1節及び2節葉柄重ともに12月20日が最も大きく、それぞれ2.4kg、2.2kg、0.2kgで、調整重は以後小さくなった(第5図)。硬度は11月21日が2.5kgで最も大きく、12月20日以後小さくなった(第6図)。糖度(Brix)は11月21日の調査開始時では2°であったが経日とともに増加し12月20日には4°になった(第7図)。以上のことから、12月20日が草丈、出荷調整重、葉柄第1節の長さ及び重さ等が最も大きく収穫適期であると判断された。

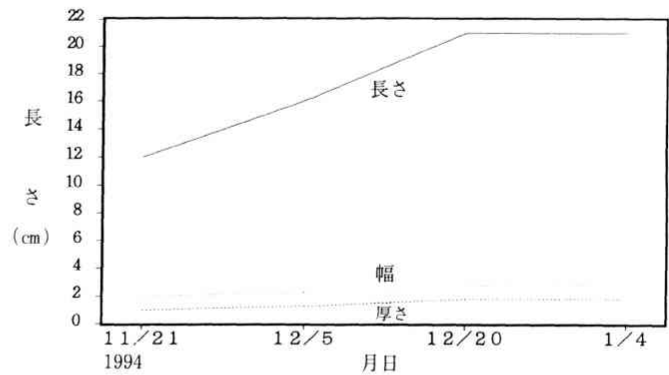
1994年は夏から秋にかけて晴天続きであり、灌水は行ったが品質への気象条件の影響は大きいと思われる。さらに品質を良くするには、育苗期間の気温を下げる方法の考案や、定植を8月下旬頃とし、畦間は灌水して地温を低く保つ栽培方法を研究していく必要がある。

第2表 栽培地の気象(1994～95)

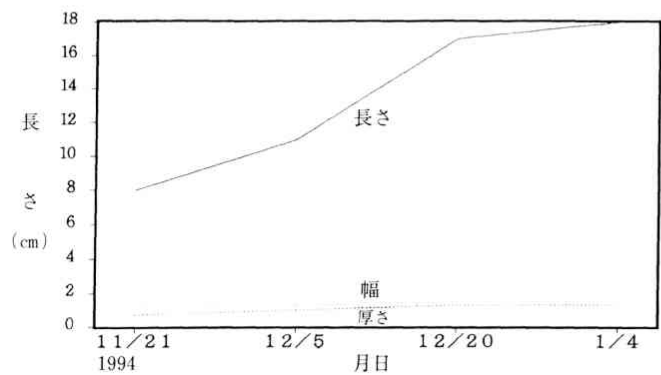
月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
最高気温(℃)	28.7	34.1	33.2	31.0	26.6	22.9	17.3	13.6
最低気温(℃)	20.7	25.4	25.5	20.8	17.2	13.2	9.0	5.9
降水量(mm)	590.0	54.0	149.0	20.0	27.3	52.0	102.0	61.0



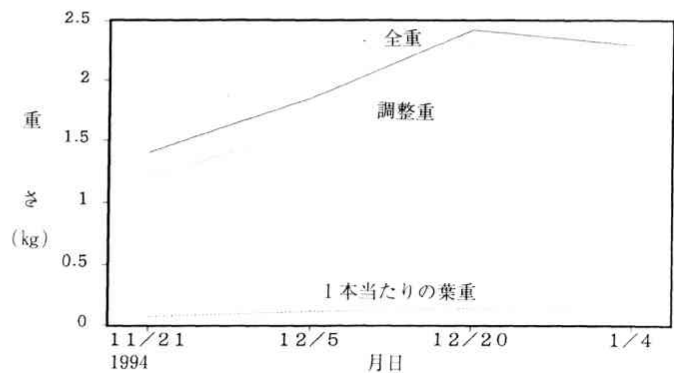
第1図 収穫期別草丈の推移



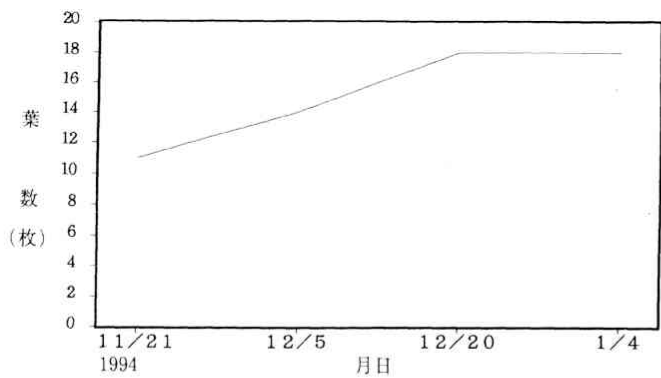
第2図 収穫期別葉柄第1節の生育



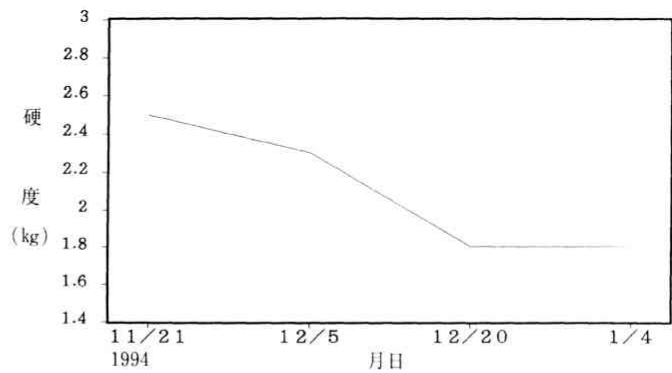
第3図 収穫期別葉柄第2節の生育



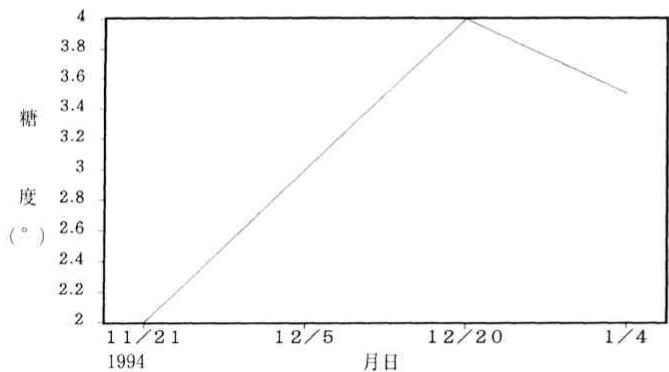
第4図 収穫期別重さの推移



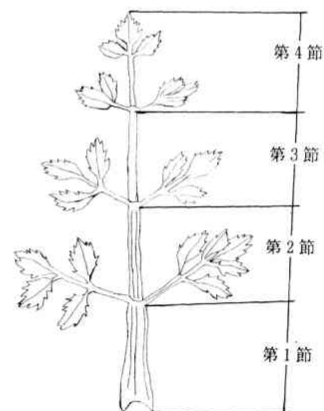
第5図 収穫期別葉数の推移



第6図 収穫期別硬度の推移



第7図 収穫期別糖度の推移



第8図 セルリー葉の形状